

天地人

2019・3・27

「打線は水もの」とはいうものの、昨年の公式戦チーム打率3割5分超えの八戸学院光星が0―2で敗れるとは、県民も予想しなかったのではない。選抜高校野球大会4日目の第2試合は、強豪・広陵(広島)の超高校級石腕・河野佳投手の前に自慢の打線が散発3安打。春夏の甲子園出場10大会連続で初戦突破の八学光星が1回戦で散った▼県勢が甲子園初戦で完封負けを喫するのは、16年春に八学光星とともに県勢2校出場となった青森山田が投手戦の末、敦賀気比(福井)に0―1で惜敗して以来。それ以前では1998年夏にまでさかのぼる▼惜しかったのは、相手の守備の乱れから得た8回2死二、三塁の好機であと一本が出なかった場面。三回の先制機での走塁ミスも痛かった▼一方、河野投手は初回到150^{キロ}の直球で度肝を抜いておいて、狙い球を絞りにくる八学光星打線の裏をかくように二回以降は一転、7〜8割の力加減で制球を重視。力任せにならない、敵ながらあっぱれな投球術だった▼八学光星も後藤丈海投手が、二回の無死満塁を無失点で切り抜けるなど変化球を駆使して粘りの投球。再三、先頭打者に四球を与えてピンチを招いても、野手が3併殺の好守でもりたて、さすがと思わせた。東北大会優勝校として実力の片鱗は見せたはず。敗戦を糧に、夏の甲子園を目指して巻き返してほしい。